

横浜開港発展小史

植木 静山

一、はじめに

我々『横浜歴史研究会』の所在地である横浜市は今日、人口三百五十万を越える東京に次ぐ日本における第二の巨大都市であり、なおもたくましく成長を続けておりますが、横浜は、約百六十五年前には人口わずか百人前後の貧しい農漁村であった。

皆様方ご存知の通り、今から百六十五年前の日本の年号は嘉永六年であり、この年の六月には、アメリカのペリー提督が、黒船四隻（このうちの二隻は当時の人々が火輪船と呼んだ蒸気船）を率いて江戸湾の入口にある浦賀にやって来た年であった。

アメリカ艦隊は第十三代大統領ミラード・フィルモアの親書を持参してきており、アメリカは親書の受領を高姿勢で要求した。このような要求は無論、交渉も長崎以外では行なわれないと突っぱねても

艦隊は動かさず、逆に日本の高官の来艦を要求した。当日やむを得ず、日本側は浦賀奉行所の当番与力であつた中島三郎助が副奉行と称して応対したが、翌日は奉行本人の来艦を要求し、それ以外の人では会わないと、アメリカ側は告げた。

翌日、浦賀奉行の香山栄左衛門がアメリカ艦隊へ向かつたが、実は香山は浦賀奉行所に二十人いる四十石取りの与力の一人であり、奉行の戸田が人選して向かわせたのだった。

会談においてペリー提督は出席しなかつたが、アダムズ参謀長ら的高官が席におり、再度長崎行きを拒否して、四日以内に親書を受け取るのか否かの返答を迫つた。米側は無理難題をかしたのだが、日本のサムライ達のお辞儀に象徴される礼儀正しさや、東洋的な修練からと思われる冷静さに終始感心していた。

浦賀からの報告を受けた江戸では、時の十二代将軍徳川家慶が病床にあり、実際にこの難局の指揮をとるのは、備後福山藩十万石の藩主であり、三十五歳の老中首座（当時の首相）の阿部伊勢守正弘であつた。（歴史小説の大家であつた司馬遼太郎さんは、著書『酔つて候』のなかで、阿部正弘について、官暦もふるく見識もすぐれ、人物も温和で、しかも果断に富み、閣僚としては三百年來の出色の人物であつた、と言っている）

実は幕府、前年嘉永五年に長崎のオランダ商館長として赴任してきたドン・クルチウスから、『別録和蘭風説書』という海外情報の報告を受けていたが、その中で新興国アメリカが日本を開国させるために強力な艦隊を派遣すること、武力を使つて開国を迫るかどうかは分からないが相当な決意であること、オランダとしては不幸なことが起こる前に日本が自主的に開国を考へるべきである、と忠告してきていた。しかし、日本を神の国と考へ異人を蔑視する尊王攘夷派が体制を維持している日本では、開国など考へられぬことであつた。だが阿部は、日本近海に

頻繁に出没するようになった異国船の情報に接するにつけ、開国をも考へるようになっていた。

阿部正弘は、尊王攘夷派の巨頭である水戸の徳川斉昭らの力も借りて、アメリカ国書受領に反対する勢力を巧みに押さえて、アメリカ国書を受け取ることをして、またアメリカ艦隊を一日も早く日本から立ち去らせることをも考へて、黒船来航から七日目の嘉永六年六月九日に、久里浜にてアメリカ国書を受け取つた。

一方ペリー提督は、日本側の回答を検討する時間的余裕は十分与えるとして、来年の三月か四月に改めて、今回の四隻の艦隊に倍する艦隊を率いて、日本の誠意ある回答を聞きに江戸湾に再来航すると告げて、来航から十日目に日本から去つて行つた。

さて、ペリーが去つた日本では、幕府はアメリカ大統領親書の内容を早急に理解する必要がある。大統領親書は英語、オランダ語、中国語で書かれており、英語はさぞおき、オランダ語は古賀茶溪、中国語は林大学頭澗齋に和解（翻訳）させて、これを付け合わせて、翻訳文を作らせた。

その大統領親書の内容であるが、それは日本を脅迫したり、見下げたりする内容のものではなく、大変丁寧な誠意あふれるものであった。

まず始めに、「日本国皇帝陛下に呈す」とあった。そして「私は、貴国政府に深い親愛の情を抱いており」「合衆国と日本が友好を結び、相互に通商上の交際を結ぶことを提案する」としていた。さらに親書は「合衆国は大西洋から太平洋まで及び、オレゴンとカリフォルニア州は陛下の国土と相對しており、蒸気船で行けば十八日間で行くことができるし、カリフォルニア州は毎年黄金を六千万ドル産出する」と述べて、アメリカの偉大さを強調していた。次に「私は、この両国が相互利益のために交易することを切望する」と目的を明確にしていた。

するものである」と強調していた。当時はまだ、地下からの油の採集は始まつておらず、鯨油は潤滑油や灯油として、日常生活には欠くことのできない必需品であった。ペリー提督の『日本遠征記』には、四百隻近くの捕鯨船が日本近海で操業していたと書かれている。

そして最後に「我々は、陛下がこれらの目的のために、日本の南部に寄港できる便利な港を一つ指定することを熱望するものである」としていた。以上が大統領親書の内容であるが、日本に対して誠実かつ誠意あふれるものであった。

もう一通ペリー提督の書簡があったが、これは通商や交易には触れていないが、「アメリカ船が海難のため漂着した時、あたかも貴国の最悪の敵であるかのような待遇を受けた」と非難していた。「具体的には捕鯨船モリソン、ラゴダ、ローレンスの件である」としていた。これらの船は日本近海で遭難し、乗組員の一部が救助されて、長崎でオランダ船に乗せて帰国させたのだが、この時の日本側の扱いを、アメリカ側は米国民

を虐待したと考えていたのだった。この誤解も国交がないために生じたものであった。

さらにペリーは、鎖国についても「このような政策が以前は賢明な政策であっても、交通が便利かつ急速になった現在では、賢明でない」と批判していた。

さて、翻訳文ができあがったので、将軍家慶公に報告しようとしたが、家慶公は病状重く、とてもその様な報告はできなかった。翌日嘉永六年六月二十二日、第十二代征夷大将軍徳川家慶は逝去した。行年六十一歳であった。後継者は家慶公の実子である徳川家定であったが、家定は幼少期に痲瘡にかかり高熱のため知恵遅れが、成人後も目立つ人物であり、後世徳川十五代将軍のなかで最も劣った将軍とも言われた人物であった。

幕府は家慶公逝去の公表を一ヶ月伸ばすこととして、この間幕府の体制をととのえ、また親藩、外様大名を問わず全国の大名にアメリカ国書に対する意見を求めることとした。

一ヶ月がたち、将軍の逝去を公表すると同時に、阿部は、オラン

ダ商館長を通じて将軍の死をオランダ本国に連絡してもらうと同時に、ペリー提督にも連絡してもらい新将軍は祖法を守らねばならず、アメリカの希望にそえるように祖法を早急に変更することはできないので、再来航の時期を大幅に遅らせるように依頼した。

この連絡と入れ違うように、長崎から飛んでもない知らせが届いた。それはロシアからプチャーチン提督率いる四隻からなる艦隊が来航して、アメリカと同様に日本の開国と交易の開始を要求すると同時に、ロシアは何かと紛争が絶えない北方領土の国境を定めた、と申し入れてきたのだった。このロシアからの来航は、アメリカ艦隊が去つてから三十六日後のことだったので、江戸城においては米・露が示し合わせているのではないかと思ひ、次はこの国が来航するのか、と不安があった。だが、阿部正弘は口にくそ出さなかつたが、開国の考えは間違ひでなかつたと確信していた。

さて、アメリカ国書に対する三百諸侯の意見書が集まつてきたが、有力大名を含めて大部分の大名が「アメリカの要求を断固拒否

して、開戦も辞さず」とする攘夷論であったし、開国に賛成なのは、二、三の大名であり、「西洋かぶれ」などと陰口されている佐倉藩主の堀田正睦。そして十三人いた兄弟が次々と亡くなり、つい最近三十五歳で彦根藩主になった強引な性格の井伊直弼らであり、井伊は開国ばかりではなく、海軍の創設まで提案して阿部を驚かせた。阿部はこの後、すぐに「大船建造禁止令」を解禁した。

さて、ペリー提督率いるアメリカ艦隊は琉球を経由して、当時ポルトガルの植民地であった中国のマカオに滞在して休養をとり、次の航海の準備に取りかかっていた。そこへ、バタビヤのオランダ総督から、「日本の皇帝である將軍が死去したので、来春予定している日本再訪の時期を大幅に遅らせるようにとの連絡が入っている」と知らせてきた。

ペリー提督は、日本で何かが起こっていると感じ、この時五十九歳であったペリーは、六十歳の現役引退を前にこの任務だけは何かでも自分の手で成し遂げたいの思いから、日本の要請とは、逆に大幅に訪問の時期を

早めることを決定した。

二、歴史に横浜が登場して脚光を浴びる

嘉永七年一月十六日（一八五四
年二月十三日）。ペリー提督は、悪天候をつけて江戸湾内に艦隊を侵入させて、小柴沖（横浜市金沢区の沖合）に蒸気船三隻、帆船四隻からなるアメリカ艦隊を、陸地に対して三日月型の陣形を組ませて停泊させた。

浦賀から予想外のアメリカ艦隊再来航の急報を受けた江戸城は、大騒ぎとなった。浦賀奉行所は、人を派遣して前回の停泊地浦賀沖に戻るよう要請したが、アメリカ側は「アメリカン停泊地」と名付けた小柴沖を動かそうとはしなかった。

日本側が譲歩して、会談を行なう交渉場所として浦賀か古都である鎌倉を提案したが、アメリカ側は国と国との交渉は、当然首都である江戸でやるべきだと主張した。しかし、この提案は日本側が拒否して譲歩しなかった。

日々が空しく五日過ぎ、十日過ぎてても、日米の交渉場所は決まらなかつた。

この間、幕府はアメリカとの交渉にあたるアメリカ応接掛を決めたが、首席には、保守派の代表のように思われる、儒学者の第十一代林大学頭復齋を任命した。阿部正弘は、昨年アメリカ国書の和訳（翻訳）を命じられた兄である潤齋が急死したので、復齋が興味を持ち熱心に和訳したことを知っていた。阿部は、攘夷派の人々に儒学者などにアメリカとの交渉は無理だろうと思わせることも、計算に入れての任命であった。

また、ロシアとの交渉には、九州の天領日田出身で苦勞人の幕臣川路聖謨と、七十六歳の筒井政憲を長崎に派遣したが、これも一見期待されない人事と見なされたが、川路は、「カミソリ川路」と言われ頭の回転が速くまた弁舌もたつ男だったし、筒井は高齢にもかかわらず、この役を買って出る硬骨の幕臣だった。そして二人は、このあと幕末外交史に燦然と輝く「北方四島」を、日本の領土とロシアに認めさせる功績を立てるのだった。

老中首座の阿部正弘は、交渉場所がなかなか決まらぬことに不安を感じていた。交渉の入口で話が

こじれてしまえば、その結果はどうなるか分からなかつたからだ。そこで阿部は昨年、浦賀奉行として活躍した与力の香山栄左衛門を呼んで、ある任務を託した。

翌日、香山は艦隊を訪れ、昨年来親しくなつたアダムズ参謀長に面会して、参謀長がペリー提督への影響力を使って、提督が交渉場所の問題で譲歩するように説得してほしいと頼み込んだ。だが、アダムズはアメリカ側の内部事情を話してから難しいと答え、今度は逆に香山に「栄左衛門。我々は交渉を友好的に進めようとしているのだ。それなのに、なぜ江戸の政府は、我々を首都である江戸に迎えようとはしないのだろうか」と質問した。

香山は、アダムズ参謀長を見詰めて、「日本とアメリカは敵対関係にあるわけではありませんが、交渉のためとは言え、いきなりペリー提督を江戸に迎え入れれば、日本の諸侯である大名達は、幕府がアメリカに屈したと考えて、これ以降、幕府は政権を維持できなくなるのです」と答えた。

参謀長は、この言葉に理解を示したが、問題を解決する名案は浮

かばなかつた。

来航から十一日目の二月二十四日。ペリー提督は、全艦隊で江戸に向かつて進航するように命じた。ペリーは日記に脅迫を実行すると書いてある。艦隊は本牧岬、神奈川宿の沖合、鶴見生麦、川崎大師河原沖、六郷川河口を越えて、羽田弁天沖（現在の羽田空港の位置）に到達した。そこからは江戸の街が一望にでき、夕やみが迫ると西日が江戸の街全体を真っ赤に染め出して、艦隊からは、まるで江戸が砲火で燃えているかのように見えた。

江戸の街は、夜通し大騒ぎとなったが、艦隊は翌日には、江戸に背を向けて遠ざかつて行ったが、小柴沖までは戻らず。艦隊は神奈川宿を少し避けた海域に今度は停泊した。

すると、香山栄左衛門が通訳を連れて旗艦ボートハタンにやって来て「この度のアメリカ側の行動は一体何ですか。今後同じようなことが起これば、日本側は実力で阻止します」と大変な剣幕で告げた。アダムズ参謀長は驚きながら、これを聞いた。

更に、香山は続けた。「交渉場

所について、新しい提案がありま

す。この向かいの陸地はいかがでしょうか」これにもアダムズは驚き「随分と辺鄙な場所のようだが、いったい何という場所かね」と尋ねた。横浜村です。これからヨコハマに上陸してみませんか」

実地調査して戻ると、アダムズはペリー提督に報告したが、ペリーは不機嫌に言った。「ヨコハマは辺鄙な場所です、数軒の農家と漁師の家しかないのだな」「はい、何も無い所ですが、障害物もなく交渉を行うには理想的な場所だと思います」

ペリーは早速、威嚇行動が効果をあらわしたと考えた。「ところで、カバナーカヤマは元氣なのか」「少しやつれて見えますが、元氣です」「ガバナーカヤマにも苦勞をかけたようだな。アダムズ、交渉場所はヨコハマでよいことにしよう。カヤマにそう伝えたまえ」

こうして、日米を十二日間も悩ませた交渉場所の問題は、香山栄左衛門が提案した神奈川宿の横に連なる浜である横浜村で、交渉が始まることとなり落着いた。なお、神奈川宿と横浜村の間は当時、小さな湾となっており渡船で行き来していた。従って、現在の横浜駅の位置は海底であった。

三、横浜にて日米交渉が始まる、そして条約締結へ

旧暦二月六日には、上海から帆船サラトガが補給物資を満載してやって来て、アメリカ艦隊は八隻となり一段と日本に圧力をかけることとなった。浜辺では、横浜応接所（開港資料館の位置）の建設が急ピッチで進められた。

第一回の日米交渉は、嘉永七年二月十日（一八五四年三月八日）に開かれた。

冒頭、日本側はオランダ語と中国語の回答文を渡し、口頭でも「日本は、薪水食料の供給及び、難破船と乗組員の救助は全面的に応じます。が、交易については、新將軍が祖父を守ることを誓った後なので改めることはできず。また交易するような物品もありません」と説明して、交易は断つた。

これに対して、ペリーは「本官はアメリカと中国が結んだ望厦条約と同じ通商条約が、日本との間でも結ばれることがベストだと考えている。本官は条約を結ぶために派遣されたのだから、条約が結

ばれないなら、遠からず軍艦が五十隻やって来るだろう。だが、何もかもが友好的に解決されて、軍艦が来航しないで済むことを願っている」と言い、条約案を林大学頭に渡した。日本側はこれを理解するため退席したが、皆が四書五経の素読で育っているので条約案は簡単に読めて理解できたが、内容は受け入れられないものだった。

日本側はこれを断つたが、ペリーは、なおも説得しようとして「なぜ、日本では交易は許されないのか。交易は、ある物を持つ国と持たない国の交流であり、物の交換や売買は、国と国民に大きな利益と富をもたらすのだ」と強調した。

林は、儒学者らしく「日本では自国で生産するもので十分満足しており、それに質素を旨とする生き方が、我々日本人の理想なのです」と答えた。

ペリーが反論しようとする、林がさえぎって「提督閣下。閣下が我が国に遭難や難破した船の救助や人命の貴さを訴えるために来航されたのなら、閣下の目的は達成されるのではないでしょうか。

閣下にお尋ねしますが、交易は利益には関係がありますが、人の命と何か関係があるのでしょうか」と尋ねた。

ペリーは、林の指摘を受けて考え込んでいたが、「なる程、おっしゃる通りだ。交易は間接的には人命に関係があるが、直接には何ら関係がない。大切なことは、我々の船をいざという時に日本が救助してくれることだ。この議論はしばらく保留しよう」と言った。

嘉永七年二月十五日（一八五四年三月十三日）には、雨の中アメリカの贈答品が陸揚げされて、日本側に引き渡された。贈答品は通信機、小型機関車、農機具、地図や書籍類、ライフル銃、ウイスキー、ワイン、香水、ピロッドなどの生地、菜蔬のタネ類まであった。

日本側は返礼に、力士達が米俵をかついで来て、日本にも大男がいることを証明してから、これをアメリカ側に贈った。

旧暦二月十七日。輸送船サブライが来航した。これで横浜沖の浮ぶアメリカ船は九隻となった。また、アメリカ艦隊には、漂流民のサム・パッチ（日本名仙太郎）と

呼ばれる三等水兵がいることが分かったが、仙太郎は決して上陸しなかった。

それから、交渉は続けられたが、幕府は従来通り、オランダ、清国以外には交易・通商は認めず、しばらくは様子を見たいとの方針を変えなかった。アメリカ側にも通商に詳しい海軍士官がいないという事情もあり、ペリーは今回、日本の開国と友好を決める『日米和親条約』を締結することで十分だと考えた。

条約文は日本語、英語、オランダ語、中国語で作成されて、第一条では、日本とアメリカ及び両国民は永久不朽の和親を結ぶこと。第二条では、下田と箱館の開港が決まり。第三条では、船舶遭難時の対応や救助のことが定められ。第四条では、両国民は自由で監禁されないこと。第十一条では、下田に領事が置かれること。等が決まった。

かくして、嘉永七年三月三日（一八五四年三月三十一日）雛祭りの日に、横浜応接所にて十二条からなる『日米和親条約』が調印された。

ペリー提督は厳粛な態度で「貴

国は厳法をまげて条約を結んでくれた。これは本官の深く感謝するところである」と言い、三角形にたたまれた分厚いアメリカ国旗を林に贈った。

この条約は、別名『神奈川条約』と呼ばれているが、今日の横浜の発展を見れば、百六七十年前に生きていた人々も間違いない、この条約を『横浜条約』と呼ぶだろう。

